

SICK NOVEL

written by HADEYA

1

夜。病院に帰る。距離200メートル。帰る。病院へ。街灯の光に見送られ。ゆったり、超ゆったり。感じるのは絶望。重い。余りにも重い……。

ビートはズッシリ重く、速度は超ゆっくり。歩いてから6秒が経過した。1秒後を考えると先が思いやられる。だから考えない。目を閉じ、歩き続ける。唯一の見送りは街灯。だけ。

自己紹介をしよう。俺の名は、天井仁政。訳あって病院で暮らしてる。どんな訳かって？ それは……言わないでおくよ。

今、俺は歩いてる。自分の住居である病院に帰る為に。時刻は17時57分。何で病院に住んでるかは……秘密にしておくよ。

何で俺、自己紹介なんてしてるんだろうな？ 誰に対し、何を証明したいんだか。正直、俺にも良く分からねえんだ。けど俺は自分の住居である病院に帰らなければならねえんだ。何で帰るかは秘密にしておくよ。

あ、あれ？？？ 今、何かが横切ったぞ。見たろ、君も？？？ 見間違いじゃない。本当に見たんだ。嘘じゃない、本当に何かが横切ったんだ、目の前を。無色透明な何か、が。

嘘よ。

う、嘘じゃない……嘘じゃない！ 本当に〈何か〉が目の前を横切ったんだ！ 嘘じゃない、嘘じゃない！！

一体、何を見たんだ？？？ もしかしたら……過去が関係しているのかも知れない……分かった、言うよ、言うから勘弁してくれ。

俺が病院に住むようになったのは〈万引き〉が、きっかけなんだ。言い訳する気はないけど、俺は一欠片のチョコレート万引きしたんだ。〈セブンイレブン八代支店〉で。店を出たところで店員に捕まって……何とか逃げたんだ。走り疲れて右拳を見ると血塗れだったんだ。

その時も〈何か〉が目の前を横切ったんだ。怖くなって金切り声を上げたら、パトカーが駆け付けてさ。で、病院に住むようになった訳。な訳で26年間、俺は病院で暮らしてるんだ。医療保護入院って言う契約形態で。家族は言ったよ——産むんじゃなかった、こんな子って、ね。他にも色々な言葉を浴びせて来やがってさ。お前は生ゴミの匂いがするとか、お風呂に入りなさいよ、とか。うるせえんだよ、クソ婆ってな。誰にも言わないでくれよな。俺は

——何か、が目の前を横切った。気付くと俺は金切り声を上げていた。衛生士のクソツタレ共に拘束されて監禁される訳。隔離病棟に。

26年間、住んでるけど楽しいぜ。風呂も入らなくて済むし、リラックスできるニッコリ部屋。これでもう、下らない戯

CLACK STORY

written by HADEYA

1

「返して！返して！」

犯人は容赦なく、引き金を引いた。

パン！ 乾いた銃声がして我が子は死んだ。目の前で呆気なく……死んだ。

ビルが倒壊する。轟音と共に。天井が崩れ、頭上に降り注ぐ。覚えてるのは、そこまで。ビルの下敷きになり、大怪我を負った。

衰え。リハビリに明け暮れる日々。全身が痛む。痛む身体を鞭打って、書く。書く事で自分自身を取り戻す事に専念する。

頑張れ———自分に言い聞かせ、書く。懸命に。一文字一文字、力を込め、精魂を込め。

もう駄目かも知れない……一抹の不安が頭を過る。書く。書く意外に生きる術を知らないからだ。

「何で書くの？」

いつしか尋ねられた事がある。当時、答えは見出せなかった。今なら分かる。自分が何故、書くか。

「返して！返して！」

犯人は容赦なく、ピストルのトリガーを引いた。

最愛の娘は死んだ。目の前で。最期の言葉は「ありがとう」。メッセージを心に刻み、死を静かに見守った。

ビルが倒壊する。完全に。死んだ、皆。リハビリに明け暮れる。書く。一文字一文字、魂を込め。深夜、悪魔が枕元に現れた。悪魔は物静かに告げた。

「分かっちゃいないようだから教えてやる。本当の地獄はこれからだぜ」

「フッフ……」

笑った。何故、笑ったか自分でも理解できない。

「ハハハハ！！！」

腹を抱え、ゲラゲラ笑った。何故か笑いが……笑いが……思わず、嘔き出した。笑わずにいられなかったのだ。

深夜のリハビリ病棟———俺は自分でも何故、笑うか理解できなかった。

MOON LIGHT

written by HADEYA

1

それは暗い暗い脳神経外科の実験室前。二人の看護師が両脇を掴み、俺を引き摺る。
紙おむつの感触に違和感を覚える。とにかく暗い。暗いんだ、本当に……。
やがて椅子に座らされる。皿に乗ったアンパンを一つだけ食べる。大勢の患者が一行に並び。
アンパンは最悪のテイストがする。ネズミの餌みたいな——
まだ電気治療は7回も残っている。俺の未来はどうなる？ 退院後の就職活動と先の見えない社会情勢。
隣を見る——死人のような腐った魚の眼差しでアンパンを貪り食っている患者。笑顔と縁のない人生。
フロア全体が濃い緑色で、時折、不気味なノイズ音が聴こえる。突然、俺は立ち上がり、椅子を掴むと力任せに壁
に投げ付け——

*

ガシャン! という音で我に返る。どうも俺は喫煙所でタバコを吸っているようだ。

隣に座る男性に問うた。

「……今日は何月何日ですか？」

彼が俺を見て、ニタリと笑う。涎ダラダラの口元から発せられる言葉は、

「俺、オカマだけど——」

彼の指先はタバコの根元で焦げている。突然、彼は跪き、祈り始めた。それを目の当たりにする〈ブロイ〉が言う。
切実な口調で。

「ヤバいよ……街が……様子が可憐いんだ……」

ブロイの充血した目が泳ぐ。目の前では祈祷が続いている。

暗い。真っ暗、だ。

先が読めない。全く読めない。自分がどこにいて、何をしているかが理解できない。突然、俺はドアを拳でブン殴った。

窓から見える景色は、月明り。月光の美しさが俺を束縛し、身動きを取れなくする。

……俺の鼻息は荒い。突然、俺は泣き出した。ワンワン、ワンワン泣き出した。

俺は自分が惨めだった。(了)

キリミハデヤ

hadeyakirimi@gmail.com

81-080-9832-0574

口座名義 モリカワ ケンタロウ

三井住友銀行(店番号232) 普通口座 口座番号:7342872